

黙示録11章「諸国民の怒りの時」

1A 異邦人に明け渡された神殿 1-13

1B 荒布の預言者 1-6

1C 踏みにじられる聖都 1-3

2C 二本のオリーブの木 4-6

2B 死者からの復活 7-13

1C 義人の死を喜ぶ住民 7-10

2C 神をあがめる敵 11-13

2A キリストのものとなる世の王国 14-19

1B この世への偉大な力 14-18

2B 至聖所からの災い 19

本文

黙示録 11 章を開いてください。私たちの黙示録の学び、10 章を思い出してください。七つのラッパが吹き鳴らされて、残り第七のラッパが吹き鳴らされることについて、天から降りてきた、イエス・キリストご自身の栄光と力を身にまとった力強い御使いが宣言しました。「黙示 10:6-7 もはや時が延ばされることはない。第七の御使いが吹き鳴らそうとしているラッパの音が響くその日には、神の奥義は、神がご自身のしもべである預言者たちに告げられたとおりに成就する。」この御使いは、開かれた巻き物を持っていました。小羊なるイエス様が封印を解かれた巻き物です。全て、主が地上で裁きを行なわれる巻き物が開かれています、それでもまだ隠されていたけれども、明らかにされる神の真理があるのだ、ということです。それでヨハネは、巻き物を食べて、口には甘かったけれども、腹には苦い思いをしました。そして預言を行ないます。

11 章から、黙示録において最も本格的な預言の内容に入っていきます。主がダニエルに示された、聖所とユダの民が回復するのに定められた七十週のうち、最後の週の半ばを中心にして起こる話だからです。ダニエルが受けた幻は、このことが中心でありました。

1A 異邦人に明け渡された神殿 1-13

1B 荒布の預言者 1-6

1C 踏みにじられる聖都 1-3

1 それから、私に杖のような測りざおが与えられた。すると、こう言う者があった。「立って、神の聖所と祭壇と、また、そこで礼拝している人を測れ。

「杖のような測りざお」とありますが、これはヨルダン川の岸辺に育つ葦で、成長すると 6 尺ほど

になるそうです。それが測り竿として使われていました。エゼキエルの見た幻を私たちは読みましたが、40章以降に神の国における神殿の幻がありましたね。そこに、神殿の寸法を測るために、手に六キュビトの測り竿を持っている人がエゼキエルに神殿の寸法を教えていた場面がありましたね(40:5)。同じように、ゼカリヤ書にも、測り竿を持っている幻があります。こちらを読んでみません。「2:1-5 私が目を上げて見ると、なんと、ひとりの人がいて、その手に一本の測り綱があった。私がその人に、「あなたはどこへ行かれるのですか。」と尋ねると、彼は答えた。「エルサレムを測りに行く。その幅と長さがどれほどあるかを見るために。」私と話していた御使いが出て行くと、すぐ、もうひとりの御使いが、彼に会うために出て行った。そして彼に言った。「走って行って、あの若者にこう告げなさい。『エルサレムは、その中の多くの人と家畜のため、城壁のない町とされよう。しかし、わたしが、それを取り巻く火の城壁となる。…主の御告げ。…わたしがその中の栄光となる。』」ここから察するに、測り竿というのは、それが神のものであるという、神の所有であることを示すためのものであることが分かります。今、神殿の聖所と祭壇、そして礼拝している人を測るのですが、主はこれらのものは神のものであるということを言い表しています。

2 聖所の外の庭は、異邦人に与えられているゆえ、そのままに差し置きなさい。測ってはいけません。彼らは聖なる都を四十二か月の間踏みにじる。

聖所の境内は、いくつかの区画に分かれています。一つは祭司だけが入ることのできる、祭壇のあるところ、そして神殿そのものです。祭司が入って、供えのパンの机や燭台、香壇があり、そして至聖所に入ることのできる、その区画です。それからヘロデの建てた神殿であれば、イスラエルの成年男子だけが入ることのできる区画があります。そしてイスラエル人のみが入ることのできる「婦人の庭」があります。やもめが献金箱に一レブタを入れたというのは、その中で起こった出来事です。そして、外庭があり、そこは異邦人も入って来て良い所であります。しかし、この神殿においては、測り竿は「異邦人に与えられているゆえ、そのままに差し置きなさい。測ってはいけません。」と言っています。この「差し置きなさい」という言葉は、「外に投げなさい」という意味でもあります。つまり、神の所有の区域ではないということです。これは、単純にヘロデ時代の神殿の異邦人の庭以上の響きがあります。つまり、「神を敬うのではない、信仰的には妥協している結果として、異教徒に明け渡されているのだ」ということです。

私たちにも、教会において、「どんな人であっても、悔い改めてキリストのところに来ることができると」という広い間口があっても、「罪を教会の中に許す領域が出来てしまう」ということには、大きな違いがありますね。イエス様は罪人と食事をされましたが、その罪人はイエス様にとって悔い改めたのであり、イエス様が罪と交わったのではなりません。

ですから、第二神殿時代のヘロデの神殿においては、異邦人は改宗者としてまことの神をあがめるためにここに来ていたのですから、神は彼らを受け入れられる御心でありましたが、ここでは

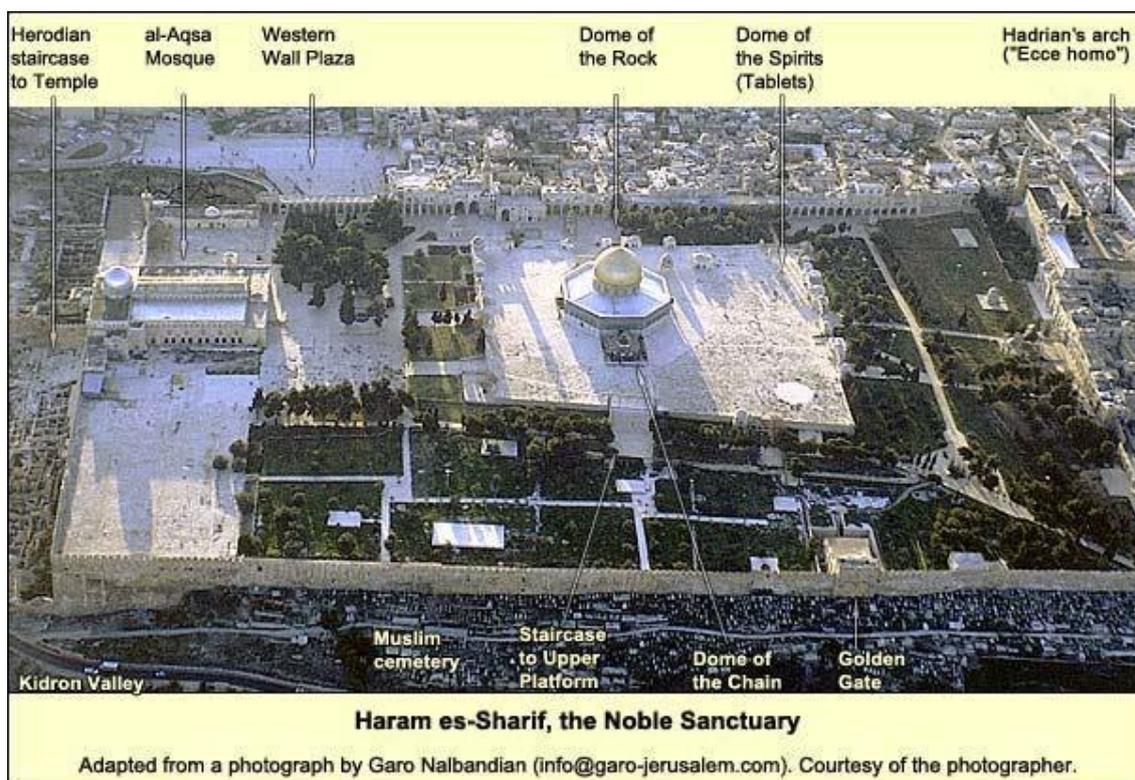
「捨ておきなさい」と言われて、引き離しておられます。これは第三神殿の姿であり、神殿を再建するも信仰的に妥協している姿であるということです。その証拠に、「彼らは聖なる都を四十二か月の間踏みにじる。」とあります。42 か月とは、七十週目の後半の三年半のことです。その時に、黙示録 13 章によると、獣が聖所の中に入り、自分こそが神としてあがめられないといけなし、獣の像がそこに置かれて拝まれるようになる、ということなのです。それがイエス様がオリーブの山で言われたことすし、パウロがテサロニケ人に教えていたことであります。「彼は、すべて神と呼ばれるもの、また礼拝されるものに反抗し、その上に自分を高く上げ、神の宮の中に座を設け、自分こそ神であると宣言します。(2テサロニケ 2:4)」これは、一昨日読んだ、ダニエル書 11 章の反キリストの描写そのものですね(11:36-37)。

ダニエル書 9 章 27 節には、ユダの民と聖なる都エルサレムについて、最後の第七十週において、反キリストが「一週の間、多くの者と堅い契約を結び、半週の間、いけにえとささげる物とをやめさせる。」とありました。ここで、異邦人の君主との契約を多くのユダヤ人が結ぶということが分かります。その内容が、聖所についてのことで、そこに再建をするようにさせることが、その契約の中から見ることが出来ます。しかし、それは偽りの契約です。信仰的に妥協している契約です。政治には、妥協は付き物ですが、彼らは主を神としている信仰者のはずです。神の神殿において妥協してはいけませんが、礼拝ができるのであればということで、外の庭をそのまま異教徒に捨て置くという決断をするのです。

今、考えられるその神殿再建の方法であります。ユダヤ人にとって神殿を建てるのは、主がお定めになったところでなければいけません。ダビデがエブス人アウラナから購入した打ち場、すなわちアブラハムがイサクを捧げたモリヤの山でなければいけません。そこにソロモンが神殿を建て、そしてバビロンによって滅ぼされた後も、同じ所に神殿を再建しました。そしてヘロデ大王が、大体的な改修工事によって、その第二神殿を建てています。そしてローマによって神殿が破壊されて、それからイエス様が言われた「異邦人の時」を迎えます。「人々は、剣の刃に倒れ、捕虜となってあらゆる国に連れて行かれ、異邦人の時の終わるまで、エルサレムは異邦人に踏み荒らされず。(ルカ 21:24)」私たちは、エルサレムがローマ、ビザンチン朝、イスラム、十字軍、再びイスラム、マムルーク、オスマン、英国委任統治と異邦人の勢力によって踏み荒らされたことを見ました。神殿の敷地も、神殿が建てられていたところに、岩のドームをイスラム教徒が七世紀に建てたものです。イスラエルが 1948 年に建国しましたが、すぐに独立戦争が勃発、エルサレム旧市街はヨルダンの手に渡りました。しかし 1967 年、すなわちちょうど 50 年前、イスラエルがエルサレムを奪取しました。ところが、時の国防大臣、モシエ・ダヤンが神殿の丘はそのまま、ヨルダンのイスラム組織ワクフ(Waqf)に明け渡したのです。それで、治安はイスラエル当局が担当するものの、神殿の丘そのものはイスラムの支配の中に今に至るまでなのです。

しかし、ここからが味噌です。今、神殿の丘を訪問すると、岩のドームがあるのですが、その中に、

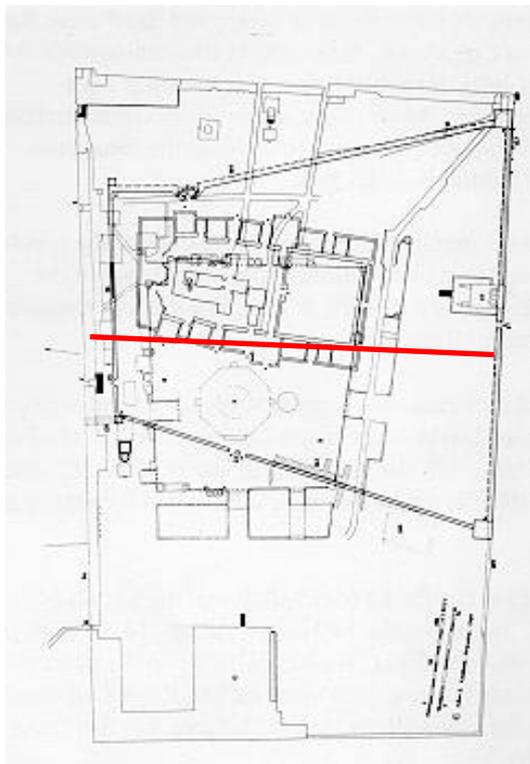
至聖所の契約の箱が置かれていたと言われているモリヤ山の床岩があると言われています。それが一般的な見解でした。ですから、岩のドームを取り除かなければ神殿を建てることはできないと言われています。しかし、もしそんなことをしたら、世界中のイスラム教徒が立ち上がり、文字通りの宗教戦争が勃発することでしょう。しかし、おかしいのは東の門の上に建てられているはずである今の城壁の門「黄金門」が、岩のドームの東に位置しないのです。岩のドームよりも、少し北側にある「霊のドーム」あるいは「板のドーム」と呼ばれる小さなドームに立つと、そこからちょうど東に黄金門があります。そして、そのドームも、元のモリヤ山の床岩が見えるところです。もしかしたら、ここが至聖所のあった場所、契約の箱が置かれていた場所ではないか？ということです。そ



うしたら、政治的解決が可能です。つまり、神殿をここに立てても、岩のドームを壊す必要がないということです。神殿の南の部分はそのままイスラム教の管轄下に置き、分離壁でも作れば、隣り合わせで神殿を建てることのできるというものです。もしそうであれば、異邦人に外の庭を差し置いて、それで内庭だけが神のものとするだけで、妥協することができます。

私がイスラエル旅行に合計七回行きましたが、その都度に立ち寄っているのは、「神殿再建財団」"The Temple Institute"です。彼らは、ユダヤ教の中でも変わった考えを持っています。それは、「自分たちが神殿を再建することで、メシヤが到来することをお迎えできる」という考えです。主流のユダヤ教では、「メシヤが到来されて、神殿を建てられる」との考えです。それで彼らは、神殿に使用する祭具を作っています。大祭司の祭服、供えのパンの台、そして何よりも金の燭台、メノラーを造りました。それを嘆きの壁の近くに動かして、いつか神殿の丘の敷地内に持っていく日を夢

見えています。



3 それから、わたしがわたしのふたりの証人に許すと、彼らは荒布を着て千二百六十日の間預言する。」

靈的に妥協している状態の中で、主が人々をご自身に立ち上がらせるべく、二人の証人を建てられます。彼らは、「荒布を着て」とあります。つまり、罪に対する悲しみ、悔い改めへの呼びかけを表している服装です。そして、「千二百六十日の間預言する」とありますが、つまり三年半の間、預言をします。最後の七年間が始まって、そこから三年半、反キリストが自分の正体を現すまでの間、信仰的に妥協して反キリストを受け入れているユダヤ人たちと、偽りの平和の中で溺れている世界の人々に対して、まっすぐに待ったをかける預言者を起こされるのです。

2C 二本のオリーブの木 4-6

4 彼らは全地の主の御前にある二本のオリーブの木、また二つの燭台である。

この言葉の背景は、ゼカリヤ書に出て来る幻です。預言者ゼカリヤは、エルサレム帰還後、神殿再建を行っていたユダヤ人たちに対して預言した預言者です。ユダヤ人がバビロンから戻ってきたのですが、神殿建築の働きは当時の異邦人たちによって阻まれました。しばらくその工事は滞っていたのですが、預言者ハガイとゼカリヤが来て、彼らを鼓舞し、神殿を建てる勧めを行いました。そこでゼカリヤ書は、今まで異邦人に踏み荒らされてきたエルサレムが回復する預言となっています。当時のエルサレム再建だけでなく、終わりの日にイエス・キリストが再臨された後に回復するエルサレムのことも預言しています。

彼は合計八つの幻を見ましたが、五つ目の幻が、一つの燭台と、七つのともしび皿にそれぞれ付いている管と、その管が二本のオリーブの木につながっている、というものでした。これは何ですかとゼカリヤが聞くと、天使はこう答えました。「これは、ゼルバベルへの主のことばだ。『権力によらず、能力によらず、わたしの霊によって。』と万軍の主は仰せられる。(4:6)」ゼルバベルとは、当時のイスラエル人たちの政治指導者でした。彼に、この神殿建築は大変かもしれない、いや、能力や権力によっては成し遂げられないが、わたしの霊によって成し遂げられる、という励ましの

ことばをゼルバベルに語りかけているのです。もう一人、宗教指導者に大祭司ヨシュアがいました。そして、ゼカリヤは、「油を注ぎだす、オリーブの二本の枝は何ですか。」と聞きました。すると天使は、「これらは全地の主のそばに立つ、ふたりの油注がれた者だ。(4:14)」と答えています。この油注がれた者は、大祭司ヨシュアと、総督ゼルバベルのことです。

つまり、彼らがモデル、型となって終わりの時にそれと同じ働きをする二人の証人が立てられるということでもあります。神殿再建について、まっすぐに神に対する悔い改めと清めを経験した彼らのように、霊的復興なくして再建だけあっても意味がないということを示すことができる人々です。

5 彼らに害を加えようとする者があれば、火が彼らの口から出て、敵を滅ぼし尽くす。彼らに害を加えようとする者があれば、必ずこのように殺される。6 この人たちは、預言をしている期間は雨が降らないように天を閉じる力を持っており、また、水を血に変え、そのうえ、思うままに、何度でも、あらゆる災害をもって地を打つ力を持っている。

二人の証言は、世界にある平和とは真っ向から反対のことを行なっているのです。人々は怒り、なんとかして滅ぼそうとします。しかし害を加えようとすればするほど、自らが滅んでいきます。このようなことを行なった偉大な預言者が、二人いました。エリヤとモーセです。エリヤは、イスラエル王アハズヤは死ぬという預言をして、それに怒ったアハズヤは、エリヤを捕まえようとしてやって来た五十人の隊長を、天からの火を下して焼き尽くしました(1列王 1 章)。モーセの場合、モーセとアロンに齒向かったコラとコラに追従した 250 人がいました。コラは立っている地面が割れて、生きたまま地獄に落ちましたが、250 人は、主のところから出た火によって、焼き尽くしてしまいました(民数 16:35)。そして、雨が降らないように天を閉じる力を持っている、というのは、エリヤが祈ったとき、雨が三年半の間降らなかったことがあります(ヤコブ 5:17)。水を血に変えるというのは、十の災いがエジプトに下ったとき、モーセを通して、第一の災いがナイル川の水が血に変わったという災いがあります。

そこで、ここの人物は実際にエリヤとモーセではないかとも考えられます。旧約聖書の最後の書物、マラキ書の最後に、次の預言があります。「見よ。わたしは、主の大いなる恐ろしい日が来る前に、預言者エリヤをあなたがたに遣わす。(4:5)」終わりの時に、主が来られる前にエリヤが来ます。当時、バプテスマのヨハネがいました。彼は、「エリヤの霊と力で主の前ぶれをし、(ルカ 1:17)」と言われた人物です。しかし、「あなたがたが進んで受け入れるなら、実はこの人こそ、きたるべきエリヤなのです。(マタイ 11:14)」とイエスさまは言われました。ユダヤ人たちが彼を進んで受け入れるなら、神の御国は預言どおり立てられたのであるが、ユダヤ人が拒んだので、「エリヤは来」る(マタイ 17:11)とイエスさまは未来形でエリヤの到来を預言されました。そしてエリヤとそしてモーセが、イエスさまが高い山で栄光の姿に変貌されたとき、いっしょにいたということもあり、エリヤは預言の代表であり、モーセは律法の代表ですから、終わりの時に二人が証人として

現われるのは妥当であると考えられます。

2B 死者からの復活 7-13

1C 義人の死を喜ぶ住民 7-10

7 そして彼らがあかしを終えると、底知れぬ所から上って来る獣が、彼らと戦って勝ち、彼らを殺す。

「底知れぬ所から上って来る獣」とは、反キリストのことです。黙示録 13 章に、反キリストが悪魔から、力と位と大きな権威が与えられることが預言されています(2 節)。彼は打ち殺されましたが、その致命的な傷が直ったと書かれています。その時、底知れぬ所からの力を付与されたと考えられます。17 章 8 節にも、獣、反キリストが、底知れぬ所から上ってくると書かれています。反キリストが、第七十週目の半ばで、これらふたりの証人を殺してしまいます。

ここで大事なのは、「彼らがあかしを終えると」となっているところです。それは、使命が終わったということの意味です。彼らは使命を受けている間は、どんなに害を受けようともそれによって滅びることはありませんでした。けれども、使命が終われば死ぬことを主は許されたのです。私たちも同じです。私たちは、どんな苦難が来ようとそこから神は私たちを救い出してくださいます。けれども、主が定められた時、その使命が終えたと判断されるなら、命が取られることもあるのです。しかし、それは敗北を意味するのではないのです。

8 彼らの死体は、霊的な理解ではソドムやエジプトと呼ばれる大きな都の大通りにさらされる。彼らの主もその都で十字架につけられたのである。

ふたりの証人は埋葬されることなく、死体をさらされます。場所は、エルサレムです。イエス様が十字架につけられたのは、エルサレムの町の城壁の外です。ですから、エルサレムの町が「ソドムやエジプトと呼ばれる大きな都」と呼ばれています。神の都であるはずのエルサレムは、先に見た信仰的な妥協で、結局はソドムやゴモラのように退廃してしまいます。イザヤもかつて、イスラエルのことを、「聞け。ソドムの首領たち。主のことばを。耳を傾けよ。ゴモラの民。私たちの神のみおしえに。(イザヤ 1:10)」と呼びました。

9 もろもろの民族、部族、国語、国民に属する人々が、三日半の間、彼らの死体をながめていて、その死体を墓に納めることを許さない。10 また地に住む人々は、彼らのことで喜び祝って、互いに贈り物を贈り合う。それは、このふたりの預言者が、地に住む人々を苦しめたからである。

力強い御使いがヨハネに、「もろもろの民族、国民、国語、王たちについて預言しなければならぬ。(10:11)」と語っていましたね。ここで、このように世界中の人々が死体を眺め、また喜び祝

っている姿を見ます。私たちは 7 章において、「あらゆる国民、部族、民族、国語のうちから、だれにも数えきれないほどの大ぜいの群衆が、・・御座と小羊との前に立っていた。(7:9)」とあります。小羊の血によって洗われた白い衣の人々がこのように救われているのに対して、預言者の証しに対して拒み、憎む者たちがいて死体を見て、喜んでいるのです。「このふたりの預言者が、地に住む人々を苦しめた」と言っています。私たちは、福音の真理を聞く時に一人一人の魂を苦しめることとなります。しかし、へりくだり、悔い改める者には癒しが与えられ、真の幸いを得ます。

ところで興味深いのは、この死体をどのようにして世界中の人が見るのか？ということです。現代であれば、技術的に簡単です。エルサレムの嘆きの壁は、今インターネットで、世界中でライブ中継を見ることができます。また、マスコミが衛星中継して、死体を世界中のお茶の間に見せることでしょう。

2C 神をあがめる敵 11-13

先に、彼らが死んだのは彼らの敗北、神の証しの敗北ではないことを話しましたが、神は勝利を与えられます。

11 しかし、三日半の後、神から出たいのちの息が、彼らにはいり、彼らが足で立ち上がったので、それを見ていた人々は非常に恐怖に襲われた。12 そのときふたりは、天から大きな声がして、「ここに上れ。」と言うのを聞いた。そこで、彼らは雲に乗って天に上った。彼らの敵はそれを見た。

彼らは、三年半という期間を日にちに凝縮したような形で、三日半の間だけ信じていました。そしてこれは明らかに、イエスご自身の働きを証していることが分かります。死んだけれども復活し、そして復活しただけでなく、雲に乗って天に昇っています。イエス様を証しされたことは明らかです。しかし、13章を見ると多くの人々は、獣が死んだようにあったのに底知れぬ所からの力によって生き返ったのを見て、獣と竜をあがめるようになります。しかし、ここでさらに神は徴となる災いを与えられます。

13 そのとき、大地震が起こって、都の十分の一が倒れた。この地震のため七千人が死に、生き残った人々は、恐怖に満たされ、天の神をあがめた。

都の十分の一が倒れ、七千人が死んで、ようやくエルサレムの住民が、天の神をあがめるようになります。ここに霊的復興が起こります。二人の証人の証しがいわれています。彼らが語っていたことが、このような形で彼らがいなくなっても力を持っていることを知り、神をあがめています。「神はおられるのだ」という畏怖の念です。こうして、エルサレムで大患難の時代に徐々に、霊的に覚醒していきます。神のしもべ 14 万 4 千人以外にも、イスラエル人やエルサレムの住民から主に立ち返る人々が起こされていくのです。

2A キリストのものとなる世の王国 14-19

そしてついに、第七のラッパが吹き鳴らされます。

1B この世への偉大な力 14-18

14 第二のわざわいは過ぎ去った。見よ。第三のわざわいがすぐに来る。

第二の災いは、ユーフラテス川からの二億の軍隊でした。悪霊が体を持っているような恐ろしい災いでしたが、11章の出来事はその患難期の前半、三年半の中で起こる出来事を挿入させていたのです。そして第三の災い、つまり第七のラッパが吹き鳴らされます。

15 第七の御使いがラッパを吹き鳴らした。すると、天に大きな声々が起こって言った。「この世の国は私たちの主およびそのキリストのものとなった。主は永遠に支配される。」

第一のラッパが吹き鳴らされる時に、「天に半時間ばかり静けさがあった(8:1)」とありましたが、ここでは「天に大きな声々」が起こっています。それは、これからも起こる天における歓声ですが、「この世の国は私たちの主およびそのキリストのものとなった。」という事実を見て、喜んでいるのです。この「この世の国」というのは、正確には「この世界の諸王国」というものです。これらが、全てキリストのものになったのです。そして主が永遠に統治されるのです。(ちなみに、この箇所はヘンデルのメサイアで合唱で歌う部分です。)このことは、数々の預言者が語っていたことでした。ダニエル書には、それが人の像として現れ、人の手に抛らず切り出された石が人の像を粉々にして、その後で石が大きな山となって全地に満ちます。ハガイ書にも、「わたしは、すべての国々を揺り動かす(2:7)」とあります。

そして、キリストの到来と神の国の確立が、地においては黙示録 19章以降にならないと出てこないものを、既に天においてはそうなっていることを教えているのです。天においてはそうなっていて、けれども地上ではそのように見えないということがあります。私たちの救いは、キリストにあつてすでに義と認められているだけではなく、栄光が与えられているとあります(ローマ 8:30)。主にあって私たちの姿はすでに栄光に変えられているのですが、まだその姿を地上にいる私たちは見ていません。同じように、天においてはキリストの統治は現実のものとなっているのですが、地上においては相変わらず、諸国が自国の力と栄光で奢っているのです。

16 それから、神の御前で自分たちの座に着いている二十四人の長老たちも、地にひれ伏し、神を礼拝して、17a 言った。

二十四人の長老たちが、久しぶりに出て来ました。御座の周りに座を持っている長老たちで、4

章の描写から教会の代表ではないかと考えられます。四つの生き物と共に、礼拝を行なっている時に出て来ます。ここでも、地にひれ伏して神に礼拝を捧げ、賛美しています。

17b 「万物の支配者、常にいまし、昔います神である主。あなたが、その偉大な力を働かせて、王となられたことを感謝します。18 諸国の民は怒りました。しかし、あなたの御怒りの日が来ました。死者のさばかれる時、あなたのしもべである預言者たち、聖徒たち、また小さい者も大きい者もすべてあなたの御名を恐れかしこむ者たちに報いの与えられる時、地を滅ぼす者どもの滅ぼされる時です。」

「偉大な力」というのは、後に 16 章に出て来る、神の最後の七つの鉢の災いのことです。神の最後の御怒りが、偉大な力をもって現れます。そして「諸国の民は怒りました。」とあります。これは既に、神の証しに対して怒りを発する諸国の民の姿を見ました。二人の証人の死体を喜んでいいます。そしてこれから 12 章と 13 章に諸国の民が怒っている姿が出て来ます。福音の真理に対して怒っているのです。この終わりの幻については、詩篇第二篇にもありました。「なぜ国々は騒ぎ立ち、国民はむなしくつぶやくのか。地の王たちは立ち構え、治める者たちは相ともに集まり、主と、主に油をそそがれた者(キリスト)とに逆らう。(1-2 節)」

しかし、そのことに対して「あなたの御怒りの日が来ました。」とあります。神が、諸国の民が神の証しに怒っていることに対して、神ご自身が御怒りをもって臨まれるということです。黙示録 16 章における鉢の災いが下ったところにそれが出て来ます。テサロニケ人に対して、パウロは苦しめている者には苦しみをもって神が報われることを話しました、そしてこう言いました。「そのとき主は、神を知らない人々や、私たちの主イエスの福音に従わない人々に報復されます。そのような人々は、主の御顔の前とその御力の栄光から退けられて、永遠の滅びの刑罰を受けるのです。(2テサロニケ 1:8-9)」さらに、「聖徒たちに対する報い」も書かれていますね。これは、黙示録 17-18 章において出て来ます。聖徒たちの血を流すことに対して、バビロンを崩壊せしめることによって報われることを書いています。

2B 至聖所からの災い 19

19 それから、天にある、神の神殿が開かれた。神殿の中に、契約の箱が見えた。また、いなずま、声、雷鳴、地震が起こり、大きな雹が降った。

地上における幕屋は、天にあるものの写しであり、模型であることを以前、学びました。黙示録 8 章において、祭壇が出て来て、香壇も出て来ました。そして今は、「契約の箱」が見えています。主ご自身が住まわれる中心部から御怒りが下ります。その様子が七つの鉢の災いを執行する御使いが出て来る時に、もっと詳しく 15 章 5 節以降に出て来ます。

つまりは、第七のラツパ、あるいは第三の災いというものが、15-16 章に出て来る七つの鉢、神の怒りが極みになる災害であることが分かります。では 12-14 章では何が書いてあるのか？神とサタンとの戦いが繰り広げられていて、それが地上に影響を与えていく姿が描かれています。数えると七つの幻があります。女と竜、竜の敗北、そして海からの獣と地からの獣、シオンの山に立つ小羊と 14 万 4 千人、三人の御使い、それから収穫の時という幻です。そして登場人物も七つのです。イスラエル、サタン、キリスト、14 万 4 千人のイスラエル人、ミカエルとその配下の天使、反キリストと偽預言者が登場します。ここから、ダニエル書 10 章でみることが出来た真理、つまり地上で起こることは天における霊の戦いの現れだということです。私たちはゆえに、霊的な動向、悪魔の策略など、それらを知らないでいるということがあってはならないことを覚えたいと思います。